

忙 申 閑

日本中に未舗装道や水たまりが残っていた昭和30年代、私は大阪の下町で育ちました。環状線K駅付近の商店街を少し歩いた公園の近くにそのビルはありました。屋上には大きな緑色の十字の看板、周辺には労務者風の人々がウロウロしていました。時々「兄ちゃん、 血売りに行くの何処や？」と聞かれ、その十字の看板を指差したものでした。子どもではそのビルの中で何が行われているのかは分からませんでした。しかし、風向きによっては看板の横にある大きな冷却器のラジエーターから水滴が飛んで来るので、子どもたちはそれ

にあたると病気になると噂していました。

1964年当時、輸血に供される血液の、実に97.5%は売血によるものでした。血液銀行へ行くと、400mlの血液が1,659円（若いと「ダブル」といって2倍採血してくれた）で売されました。これは一日中炎天下で重労働して得られる日当に相当する額で、ちなみに、当時カツ丼一杯が120円でした。

1955年頃より、すでに頻回採血による供血者貧血や輸血後肝炎など売血制度の大きな弊害が問題となっていました。1964年（昭和39年）3月24日、駐日米国大使のEdwin Reischauer（エドウィン・O・ライ

東京オリンピック

広報委員 井上 信正

シャワー）氏が米国大使館正面で19歳の日本人男性に襲われました。右大腿部の出刃包丁による刺創、彼は近くのT病院に搬送され、大量輸血を行いながら4時間かけて手術が施行されました。しかし、ガンマグロブリンの大量療法を併用したにもかかわらず、主治医たちの心配通り大量輸血による急性肝炎を発症しました。日本政府は大慌て（周章狼狽）、即総理大臣がアメリカ国民へ謝罪し、事件5カ月後の8月20日には「輸血推進についての基本方針」を発表、翌22日閣議決定、「輸血は日本赤十字社を中心とする献血一本槍でゆく」という

国の進路が内閣総理大臣により宣言されました。これにより売血による輸血製剤はなくなりましたが、その後も原料血清の材料としての売血は細々と続けられていきました。なお、米国大使は一時軽快するも、後に肝硬変により肝臓がんを発症し、25年後に死亡されました。

因みに、この年東海道新幹線が開通、10月10日に東京オリンピックが開催されました。